テーマ『恋文』

① 芥川龍之介から、8歳年下の塚本文宛の手紙

拝啓

旅行中度々(たびたび)手紙を有難(ありがと)う。

十日の朝は五時や五時半ではまだ寝(ね)むくって、大船(おおふな)を通ったのも知らずに寝ていはしませんでしたか。

(略)

こんどお母さんがお出(い)での時、ぜひ一緒にいらっしゃい。その時ゆっくり話しましょう。

二人きりでいつまでもいつまでも話していたい気がします。

そうしてkissしてもいいでしょう。いやならばよします。

この頃ボクは文(ふみ)ちゃんがお菓子なら頭から食べてしまいたい位(くらい)可愛い気がします。

嘘じゃありません。

文ちゃんがボクを愛してくれるよりか二倍も三倍もボクの方が愛しているような気がします。

何よりも早く一しょになって仲よく暮しましょう。

そうしてそれを楽しみに力強く生きましょう。

これでやめます。

② 谷崎潤一郎から、第三夫人となった根津松子宛の手紙

（前略）

自分を主人の娘と思えとの御言葉でございましたがその仰せがなくとも、とくより私はそう思って居りました。

一生あなた様に御仕（おつか）へ申すことが出来ましたら、たといそのために身を亡ぼしてもそれが私には無上の幸福でございます。

はじめて御目にかかりました日からぼんやりそう感じておりましたが、殊（こと）に此の四、五年来はあなた様の御蔭（おかげ）にて自分の芸術の行きつまりが開けてきたように思います。

私には崇拝する高貴の女性がなければ思うように創作が出来ないのでございますが、それがようよう今日になって始めてそう云う御方（おかた）様にめぐり合うことが出来たのでございます。（中略）

今後あなた様のお陰にて私の芸術の境地はきっと豊富になることと存じます。

たとい離れておりましても、あなた様のことさえおもっておりましたら、それで私には無限の創作力が湧いて参ります。

しかし誤解を遊ばしては困ります。

私に取りましては芸術のためのあなた様ではなく、あなた様のための芸術でございます。（中略）

何の用事もございませぬが　四、五日お目にかかれませぬので此（こ）の手紙を認（した）めました。

多分五日か六日の午後に御うかがいいたします。

今日から御主人様と呼ばして頂きます。

③ 高村光太郎『智恵子抄』より【人に】から抜粋

いやなんです
あなたのいってしまうのが――

花よりさきに実のなるような
種子（たね）よりさきに芽の出るような
夏から春のすぐ来るような
そんな理窟に合わない不自然を
どうかしないでいて下さい
型のような旦那さまと
まるい字をかくそのあなたと
こう考えてさえなぜか私は泣かれます
小鳥のように臆病で
大風のようにわがままな
あなたがお嫁にいくなんて

いやなんです
あなたのいってしまうのが――

なぜそうたやすく
さあ何といいましょう――まあ言わば
その身を売る気になれるんでしょう
あなたはその身を売るんです
一人の世界から　万人の世界へ
そして男に負けて
無意味に負けて
ああ何という醜悪事（しゅうあくごと）でしょう
（後略）

④　太宰治『葉桜と魔笛』より抜粋

きょうは、あなたにおわびを申し上げます。僕がきょうまで、がまんしてあなたにお手紙差し上げなかったわけは、すべて僕の自信の無さからであります。僕は、貧しく、無能であります。あなたひとりを、どうしてあげることもできないのです。ただ言葉で、その言葉には、みじんも嘘が無いのでありますが、ただ言葉で、あなたへの愛の証明をするよりほかには、何ひとつできぬ僕自身の無力が、いやになったのです。（中略）

さびしく無力なのだから、他になんにもできないのだから、せめて言葉だけでも、誠実こめてお贈りするのが、まことの、謙譲の美しい生きかたである、と僕はいまでは信じています。

つねに、自身にできる限りの範囲で、それを為し遂げるように努力すべきだと思います。どんなに小さいことでもよい。タンポポの花一輪の贈りものでも、決して恥じずに差し出すのが、最も勇気ある、男らしい態度であると信じます。僕は、もう逃げません。僕は、あなたを愛しています。

毎日、毎日、歌をつくってお送りします。それから、毎日、毎日、あなたのお庭の塀のそとで、口笛吹いて、お聞かせしましょう。あしたの晩の六時には、さっそく口笛、軍艦マアチ吹いてあげます。僕の口笛は、うまいですよ。

いまのところ、それだけが、僕の力で、わけなくできる奉仕です。

お笑いになっては、いけません。いや、お笑いになって下さい。元気でいて下さい。神さまは、きっとどこかで見ています。僕は、それを信じています。あなたも、僕も、ともに神の寵児（ちょうじ）です。きっと、美しい結婚できます。

待ち待ちて　ことし咲きけり　桃の花　白と聞きつつ　花は紅（べに）なり

僕は勉強しています。すべては、うまくいっています。

では、また、明日。M・T。

⑤ 短歌・和歌

・瀬(せ)を早(はや)み 岩にせかるる 滝川(たきがわ)の われても末に 逢(あ)はむとぞ思ふ

崇徳院

【現代語訳】

川の瀬の流れが速いので、岩にせき止められる急流が時に一度2つに分れても再び合流するように、愛しいあの人と今はたとえ別れていても、後にはきっと必ず結ばれるものだと思っています。

・あかねさす 紫野(むらさきの)行き 標野(しめの)行き 野守(のもり)は見ずや 君が袖振る

額田王

【現代語訳】

紫草の生えた野を行き、標野を行きながら(標野の)見張りが見やしないか、いや、見てしまうでしょう。あなたが(あっちへ行きこっちへ行きながら私に)袖を振るのを。

※袖を振ることは、古代では相手の魂を呼びよせる呪術的な行為とされ、相手の心をひきつけようとする、求愛の行為とされた。

・紫草(むらさき)の にほへる妹(いも)を 憎くあらば 人妻ゆゑに われ恋ひめやも

大海人皇子

【現代語訳】

紫草のように色美しく映えているあなたのことをいやだと思うなら、人妻なのに(どうしてあなたのことを)恋い慕いましょうか、いや、恋い慕ったりはしません。(嫌ではないからこそ恋い慕うのです)

・やは肌の あつき血汐に ふれも見で さびしからずや 道を説く君

与謝野晶子

【現代語訳】

この柔らかい肌の熱い血のたぎりに触れてもみないで、さびしくはないのですか。人の道を語っているあなた。

⑥　番外編　宮沢賢治『春と修羅』より

ちいさな自分を劃(くぎ)ることのできない
この不可思議な大きな心象宙宇(しんしょうちゅうう)のなかで
もしも正しいねがいに燃えて
じぶんとひとと万象(ばんしょう)といっしょに
至上福(しじょうふく)しにいたろうとする
それをある宗教情操(じょうそう)とするならば
そのねがいから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたったもひとつのたましいと
完全そして永久にどこまでもいっしょに行こうとする
この変態を恋愛という